

美術の窓(155)

河村岷雪『百富士』と歌川広重「東海道五拾三次」

大和文華館館長 浅野秀剛

前回は『北斎漫画』の「漫画」の言葉のことを書いたが、今回は、北斎とともに浮世絵の名所絵の大成者として知られる歌川広重の代表作、保永堂版「東海道五拾三次」(1834~36)について書いてみたい。広重が何を参考にして作画したかということである。

広重がどのようにして「東海道五拾三次」を描いたかということについては、戦前から多くの人が種々のことを述べてきた。当初は、京都への旅のスケッチをもとに描いたという説が有力であったが、広重は江戸で見るこのことできる書籍(いわゆる種本)を複数参考しているということが判明し、旅はしていないと考える研究者も増えた。私は近年、現地から送られてきた情報(図像など)も参考にした可能性があるという説を提唱したが、今回はそれには触れない。広重が見た種本の中に、河村岷雪画「百富士」もあったのではないかと考えて述べてみたいのである。

『百富士』4冊は、明和4年(1767)年に成立し、明和8年(1771)冬に刊行された。江戸や東海道など諸所から見た富士山の図に発句などを添えたもので、図数は102に及ぶ。『百富士』が北斎の「富嶽三十六景」などに影響を及ぼしているのではないかとすることは、かなり早くから言われてきたが、そのことを最初に論文化したのは、磯博「河村岷雪の『百富士』と北斎

の富嶽図」(『美学論究』1、関西学院大学文学部美学研究室、1961年)である。それ以降、多くの研究者が「百富士」の後世への影響について述べてきたが、歌川広重の作品で最も有名な保永堂版「東海道五拾三次」への影響について述べた人は寡聞にして知らない。

そこで、この場を借りて、2点の作品について、影響関係を考えてみようと思う。しかしながら直接ではなく、間接的な影響ということになるかもしれない。

最初は、広重「東海道五拾三次之内 箱根 湖水図」(図1)である。この図は、切り立った断崖に配置されたモザイク状の岩塊が印象的な作品であるが、近年、赤木美智氏が「歌川広重の天保初期の画業に関する一考察—保永堂版東海道と『唐詩選画本』を手がかりとして—」(『没後一六〇年記念 歌川広重』図録、太田記念美術館、2018年)のなかで、鈴木芙蓉画「唐詩選画本」2編(寛政2年[1790]刊)のなかの一図をイメージソースとしたのではないかと述べている。赤木氏の指摘は大

筋として首肯できるものであり、広重が「東海道五拾三次」の制作に際し、『唐詩選画本』を種本の一つとして用いたことを否定しないが、「箱根」については、『百富士』の影響もあるのではないかと考える。ただ、直接的なものではなく、北尾政美画「百富士 箱根之図」(中判錦絵)からの影響である。

岷雪『百富士』中の箱根の図は、「箱根湖水」(図2)と「箱根山中」(図3)の2図ある。この2図から一気に広重の「箱根」まで飛ぶのはさすがに難しいが、間に政美の「箱根之図」(図4)を挟むとどうであろうか。切り立った断崖の間を旅人が歩む光景はよく似ていると思う。政美画「百富士」は、天明7-8年(1787-88)頃のシリーズで現在10図確認できる。詳細は省かざるを得ないが、岷雪『百富士』をベースにしたその錦絵版といった企画で、版元はかの篤屋重三郎。岷雪の「箱根湖水」と「箱根山中」、そして政美の「箱根之図」も皆、箱根の図であることも重要であろう。

もう1点は、広重「東海道五拾三次之内 由井 薩埵嶺」(図5)である。この図は、左辺の崖を誇張して中央に岩上の二本の松を大きく配置し、その間から富士を望むという構成に妙味があり、「箱根 湖水図」同様、広重にしては奇趣を狙ったものであるが、私は嫌いではない。この図の種本もいくつか指摘されてきたが、赤木氏は、葵岡北溪画「狂歌東関駅路鈴」(文政13年[1830]刊)の「由井 興津」図との類似を指摘された。そして、岩上の二本松は、広重自身が文

政13年(1830)頃に描いた「近江八景 石山秋月」(横四つ切判錦絵)の発想を応用したものであろうと述べている。確かにそのとおりであるが、「由井 薩埵嶺」の基本的構図は、かなり前から成立していたものであり、岷雪『百富士』中の「薩埵山」(図6)もほぼ同一構図となっている(この構図で薩埵を描いたのは岷雪が最初であるという自信はない)。北尾政美「百富士」にも「薩埵之図」があるという(吉田映二「浮世絵事典」による、未見)が、その図は果たしてどのようなものであろうか。

また、近景の岩上の二本松は、葛飾北斎画「(摺物風)東海道」(大奉書九つ切判錦絵、版元未詳、文化4-5年[1807-08]頃刊)の「由井」、同「東海道彩色摺五拾三次(豆判東海道)」(大奉書三十二切判錦絵、鶴屋金助版、同年頃刊)の「ゆゑ」(図7)に描かれた岩上の松と類似するので、広重はそれを学び取り入れた可能性がある。

ともあれ、広重は、それら種々指摘されるようなイメージ需要の環境のなかで保永堂版「東海道五拾三次」を作画したということとは間違いはない。



図6 大和文華館蔵(後印本)



図4 ポストン美術館蔵

図5 ホノルル美術館蔵
([保永堂版 広重 東海道五拾三次]、岩波書店、2004、より複製)図7 神奈川県立歴史博物館蔵
(永田生慈「北斎美術館2」、集英社、1990、より複製)図1 アダチ伝統木版画技術保存財団蔵
([保永堂版 広重 東海道五拾三次]、岩波書店、2004、より複製)

図2 大和文華館蔵(後印本)



図3 大和文華館蔵(後印本)

季刊 美のたより No.213

令和2年12月26日

発行 大和文華館